

Title	小幡甚三郎のアメリカ留学：福澤研究センター所蔵資料紹介
Sub Title	
Author	西澤, 直子(Nishizawa, Naoko)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	1997
Jtitle	近代日本研究 Vol.14, (1997. ) ,p.143- 163
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19970000-0143">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19970000-0143</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

小幡甚三郎のアメリカ留学

— 福澤研究センター所蔵資料紹介 —

西澤直子

一 はじめに

小幡甚三郎は、福澤諭吉と同郷豊前中津の出身で、初期慶應義塾の一翼を担った人物である。義塾の運営に力を尽くすと共に、日本で最初のイデオム・フリーズ集である『英文熟語集』（慶應四年）の編纂や、『洋兵明鑑』（明治二年）の翻訳に携わった。<sup>〔1〕</sup>大いに将来を囑望されたが、アメリカ留学中不幸にして神経を病み、滞米わずか一年余、二十六才の若さで客死した。

今までアメリカ留学中の甚三郎については、福澤の書翰か

ら「甚さんはアメリカ：無事健康のよし」といった極めて断片的な情報<sup>〔2〕</sup>が得られる程度で、詳しいことはわからなかった。しかし、平成八年福澤研究センターは、彼の書翰三通をはじめとする関係資料六点を入手し、留学中の甚三郎について、環境や心境の変化の一端を知ることができた。そこには、おそらく明治初期留学生の多くが直面したであろう苦悩があった。

本稿では資料六点の全文を掲載し、でき得る限りの説明を加えて、初期留学生の一姿を紹介したい。

## 二 小幡甚三郎関係資料の詳細と成立経緯

まず資料の書誌的な情報をまとめておく。福澤研究センターが古書店より購入した資料は、以下の六点である。

- (一) アメリカより甚三郎が次兄篤次郎にあてた書翰一通(四月八日付)
- (二) 同 母および「皆々様」宛書翰一通(四月九日付)
- (三) 同 義兄三輪一彦義弟佐々木吉十郎宛書翰一通(九月二十九日付)
- (四) 入院先の病院医師による容体書一通(和訳、一八七三年一月三十一日付)
- (五) 通っていた学校長の篤次郎宛経過報告書一通(和訳、同年二月四日付)
- (六) 兄妹妹宛篤次郎書翰一通(明治六年四月四日付)

(一)～(三)は年の記入がないが、小幡甚三郎の渡航日程から考えて、明治五年しかあり得ない。

資料の形状は、(一)から(五)までで一卷、(六)で一卷の卷子仕立てになっている。箱書きなどはないが、それぞれの書翰の内容を踏まえると、もとは明治五、六年当中津に住ん

でいた親族の誰か(義兄義弟連名の書翰が含まれていることを考えれば、中津にいた甚三郎の姉か妹の家である可能性が高い)が保存していたものと考えられる。(一)および(二)は、アメリカから東京にいる篤次郎と母親の許に届いた書翰を、篤次郎等が読んだ後で中津に回覧したと思われる、(三)は中津にいる義兄と義弟にあてたもの、(六)は東京で甚三郎死去の報告を受けた篤次郎が、詳細を中津にいる兄妹に知らせたものである。(一)の書翰の中には容体書等を親戚に回覧して欲しい旨が書かれているので、(四)～(五)は甚三郎の臨終を看取った医師(フィラデルフィアの神経病院医師ジョンズ)による容体書と、甚三郎が通っていた学校の校長コックラン(David H. Cochran)の報告書を、英語の読めない兄妹妹のために篤次郎が和訳して、(六)の書翰に添えて送ったものである。

全文は稿末に掲げた。筆者の責任において句読点を付し、字体は新字体を用いた。平仮名、片仮名は原則として原文通りとした。しかし、「へ」や「リ」といった区別のつきにくい文字や、「し」と「シ」のようにくずしが極めて似ている文字は、全体的な傾向から判断して片仮名を優先させた。片仮名の中に変体仮名を混ぜて使用している場合も、平仮名ではなく片仮名に直した。また明らかな誤字については正しく直した。

なお(二)の書翰の日付は(一)の書翰の翌日になっているが、書翰の内容からは、二者間には少なくとも一週間程度の時間の経過を考える方が自然である。(二)の書翰には何度か日付を書き直した跡があり、また当時日本は太陰曆を使用していた混乱した可能性もあるので、どちらかの日付は誤って記されたものではないかと思う。

### 三 小幡甚三郎の履歴

#### (一) 慶應義塾入学まで

小幡甚三郎は弘化二年(一八四六)に、中津藩士小幡篤蔵の三男として中津殿町に生まれた。福澤よりは十一才年少になる。維新前は仁三郎と称し、維新後仁の字を憚って甚と改めたという<sup>3)</sup>。小幡家は家禄二百石取りの上士であったが、甚三郎の父篤蔵は篤次郎甚三郎兄弟が生まれる前に、中津藩内の政争に巻き込まれて隠居を命ぜられたので、家は服部家より養子に入った孫兵衛(妻は篤蔵妹あき)が嗣いだ。すなわち甚三郎の兄弟姉妹は、長兄孫兵衛、姉うめ(三輪一彦と結婚)、次兄篤次郎、甚三郎、妹いと(佐々木吉従郎と結婚)の五人である。

甚三郎は次兄篤次郎同様、藩費進脩館で漢学を学んだようだが、管見の限りでは詳しい学歴はわからなかった。福澤論

吉による「小幡仁三郎君記念碑誌稿」には、「同藩(中津藩―著者註)の学校にて士族普通の教育を受けたり。常に他国へ遊学の志あれども、時勢に故障多く家も亦貧にして其志を遂げず」とある<sup>4)</sup>。従って甚三郎が洋学を志した時期も定かではないが、慶應義塾に入学したのは以下の事情であった。

文久二年(一八六二)二度目の洋行であるヨーロッパから帰国した福澤は、築地鉄砲洲中津藩中屋敷内の五軒長屋一棟を貸し与えられた。翌三年春には「入社帳」(入社とは社中に入るの意。入学の際に年月日、生年月日、出身地などを記した帳面。初期は姓名録と呼ばれた)を創設し、英学塾への転換も図った。いよいよ本格的な学塾運営を開始するにあたって、彼は是非とも自分の片腕となる人物が欲しいと考え、故郷である中津で有能な人材を発掘することを思い立った。そこで元治元年(一八六四)三月母に会うため帰省した際、江戸へ連れ帰ることが出来る優秀で堅実な青年はいないかと知人達に相談した。

その時白羽の矢がたったのが、甚三郎の兄篤次郎であった。しかし篤次郎は漢学を学び、藩費進脩館の教頭にまでなっていたので、洋学を学ぶことには抵抗があった。また既に父が亡くなり母一人となっていたため、江戸に出るつもりもなく、福澤に会わないよう姿を隠してしまった。福澤は小幡孫兵衛の実兄で、かつての師でもある服部五郎兵衛らに相談して、

何とか篤次郎を見つけ出し説得した。篤次郎自身も後年、「余は一家の事情ニテ、上京し難かりしかば、努めて先生に面会するを避けしが、伯母の宅にて凶らず先生に邂逅し、江戸にて書生の餓死せるを聴かずとて、強て勧めらるゝ俛に、即ち始めて東上」したと述べている。

篤次郎を説得したものの、その母親は難色を示した。そこで福澤は、次男である篤次郎は養子に行かない限り、一生部屋住みの身である、前途有望な青年がそれでは可哀想だ、江戸には養子の口も沢山あるから、是非江戸へ出すべきであると母親を説得した。福澤は後に笑いながら、養子の口を餌に江戸へ拐してきたのだと語っていたらしい。そして弟の甚三郎も、この時篤次郎と共に江戸へ出て、慶應義塾に入ることになった。

甚三郎の江戸行きが、福澤の意志によるものなのか、甚三郎の希望であったのかははっきりしない。石河幹明の『福澤論吉伝』には、「ところが篤次郎の弟に仁三郎という二十歳の少年がある。先生は此少年をも一緒に連れ帰ろうと思ひ、更に、養子の口にはもう少し若い方がよいという者もあるから次男の方も江戸にお出しなさいと説き、母堂の同意を得て兄弟二人とも連れ帰ることにした」と書かれている。しかし前述の「小幡仁三郎君記念碑誌稿」には、甚三郎自身の意志で「君も亦兄と共に行くことを欲し、親戚これを止むる者多

けれども、其志願益切にして止まず」出発前日に叔父にあたる竹下郁藏の周旋で、ようやく江戸行きが決したとなっている。

いずれにしろ彼は、元治元年六月に兄篤次郎、服部浅之助、小幡貞次郎、浜野定四郎、三輪光五郎の五人と共に、福澤に伴われて江戸へ上り、慶應義塾に入社した。

## (二) 幕府開成所出仕と塾長就任

入社した甚三郎は、福澤の力強い協力者となった。学問上では二年もたらずに自力でよく英文を解するようになり、四年目にして前述のイデオム・フレーズ集を編纂した。また生活面でも「青年の書生、或は遊惰放蕩に流る可きの恐なきに非らず」風紀が乱れる傾向もあった塾内を、彼の「氣力と正実」によって正しい「教風」に導いた。

甚三郎の語学力は塾外でも評価され、慶應二年（一八六六）十二月には兄篤次郎と共に、開成所への出役を命ぜられた。篤次郎が「開成所英学教授手伝出役」で十人扶持金五両、甚三郎が「同手伝並出役」で五人扶持金二両の記録がある。

また明治三年（一八七〇）には塾長の任務にあつたことがわかっている。初期の慶應義塾では塾長職が確立していな

かつたため、正確な在職期間はわからないが、明治四年三月の慶應義塾三田移転の際は一切を取り切つたと言われている。

る。前掲「小幡仁三郎君記念碑誌稿」に「内には教授の方を  
整へ、外は会計の事務を弁じ、普請には自から大工職人を督  
し、転居には自から車力人足〔を〕使役し、西に駆け東に走  
り、片時も休息あることなし」とその時の活躍振りが書かれ  
ている。

#### 四 アメリカ留学

##### (一) アメリカ留学へ

慶應義塾において福澤の片腕として活躍していた甚三郎が、  
アメリカへ留学することになったのは、旧中津藩主奥平昌邁  
の随行者に選ばれたためである。

奥平昌邁は、宇和島藩伊達家から養子にいらした明治維新  
時の藩主であった。彼は、明治三年十一月に旧諸侯華族の東  
京移住が命ぜられると、上京して慶應義塾内に住み、慶應義  
塾に入社した。福澤はまだ十七才の若い昌邁に、アメリカ留  
学を勧め、その随行者として甚三郎を推挙した。そして明治  
四年十二月末二人はアメリカに向け出発した。明治五年二月  
二十日の福澤英之助宛福澤書翰には「昨日アメリカより手紙  
参、殿様も甚さんもぶじ、ソルレイキと申処迄参候よし」と  
ある。<sup>11</sup>

以下資料から、留学生生活の様子を追ってみる。なお前述の

ように、明治五年は和暦はまだ太陰暦であるため、便宜上西  
暦でわかっている年号は西暦を表記し、和暦については西暦  
を併記した。

四月八日の書翰によると、奥平昌邁と小幡甚三郎は、途中  
ソルトレイクシティからシカゴまでは岩倉使節団と同道しな  
がら、明治五年（一八七二）の三月初旬には、ひとまず留学  
先のコネティカット州（Connecticut）ウインチェスター  
（Winchester）に着いた。ウインチェスターは州の北西部に  
あり、リッチフィールド（Richfield）丘陵の湖と森林の地  
域である。一七七一年には町制が敷かれた。<sup>12</sup>しかし、二人が  
着いたのは家数二、三十軒ばかりの地区で、あまりに「田舎  
ノ有様」であった。しかも生活に不便だけでなく、算数は  
割り算を学んでいるクラスが最上級で、英語とてリーダーの  
素読に困るレベルでは、とても勉学に適した環境とは言えな  
かった。甚三郎は留学費用を年間五、六百両と安く見積もつ  
たせいではないかと述べている。

そこで三月下旬には早々にニューヨークへ戻り、ブルック  
リン（Brooklyn）でプライベートレッスンを受けた後  
Polytechnic Instituteで学ぶことに決した。Polytechnic  
Instituteは工業に関する諸技術や科学を学ぶ学校と思わ  
れる。<sup>13</sup>校長のコックランは normal school（一八二〇年代  
から誕生した教員養成学校）の校長をも務めた人で、何より

も「日本へ学問ノ要用ナルコト能ク承知」し留學生達に便宜をはかつてくれていたので、甚三郎も漸く腰を落着けることができた。

既にニューヨークでは、華頂宮博経（東隆彦、海軍軍人となるため一八七〇年八月からブルックリンで学ぶ、一八七三年怪我により帰国）を始め、何人もの日本人が学んでいた。その中で甚三郎は、松田晋斎、竹村謹吾、佐藤百太郎、江木高遠らと親交を結んだ。彼らの略歴は次のようなものである。

#### 松田晋斎

松山出身。慶應元年（一八六五）四月慶應義塾入社。一八七一年工学系の学問を学ぶため、藩もしくは旧藩主の費用で渡米。帰国後は工部省工学寮少師などを勤める。訳書に「清英交際始末」。

#### 佐藤百太郎

嘉永六年（一八五三）佐倉生まれ。順天堂二代目佐藤尚中長男。横浜で宣教師へボン夫人から英語を学ぶ。一八六七年私費でサンフランシスコへ赴く。一八七一年一度帰国するが、すぐに公費留学、経済学を学ぶ。一八七六年帰国後は大蔵省出仕。また明治八年（一八七五）には狭山茶の米国向け輸出を始めた。

#### 竹村謹吾

江戸出身。甚三郎は「駿府ノ人」と書いているので、幕臣か。一八七一年英語を学ぶため、私費で留学。

#### 江木高遠

福山出身。福山藩儒江木鰐水の子。一時高戸家へ養子となる。大学南校・東校で学び、一八七〇年八月華頂宮博経の従者としてアメリカに初渡航。軍事を学ぶ。一八七三年帰国。一八七四、六年再び渡米、コロンビア法律学校で学ぶ。帰国後外務省出仕。一八八〇年三度目の渡米時、冤罪に抗議しピストル自殺。専修大学の設立にも関与した。<sup>(14)</sup>

四人の中では佐藤が、甚三郎も「当国久シクアル人」と書いているように、すでに約四年の滞米生活を経験していたが、他の三名は甚三郎より一寸早く、一八七〇年の後半から一八七一年にかけて渡米した先輩であり、学問や生活上の情報交換をするにも好都合で、話も合ったのだろう。小幡篤次郎の書翰を見れば、甚三郎が体調をくずしてからも、松田、佐藤、江木は何くれとなく面倒をみてくれ、特に江木は最期まで付き添って、甚三郎のために力を尽くしてくれている。

(二) 留学生生活

四月八日付書翰の追書で甚三郎は篤次郎に、本で読んでわかっていたつもりでも、実際に経験してみるとわからないことも多く、本を翻訳する際には実際に経験した人に確かめる方がよいとアドバイスしている。留学生生活から得た実感である。

四月九日の書翰によれば、甚三郎はしばらく奥平昌邁とは離れて、華頂宮博経の知り合いの医師宅で寄宿生活を始めている。奥平と離れるのは長くても二週間くらいと書いているが、九月二十九日の書翰にも「不変医者ニ修業仕候」とあるので、奥平が途中で合流した可能性もあるが、いずれにせよ寄宿生活は長く続いた。

その中で甚三郎は、言葉もさることながら、彼我の習慣の違いに戸惑った。肉類ばかりの食事内容やマナー、石鹸で体をあらったり、日に何度も髪をとかしたり、日本にいる時に比べれば衣服も頻繁に替えねばならず、少しは肥満して健康になるだろうとか、「若い江戸ノ御嫁さんカ御嫁入りテモシタトキ」のように立ち振る舞いや身嗜みに気をつければ、色男になるだろうとか茶化してはいるが、閉口したようである。留学生生活には経験しなければわからないことも多かった。

またコックランの書翰を読むと、当時の日本人留学生達は、まさに寝食を忘れて学問に没頭していた。彼は、日本人留学

生達が勉学に熱中するあまり体を壊すことを心配し、いくらか学んでも病気になるってしまえば元も子もないので、身体の健康を維持するため、適度に運動し十分に睡眠をとることの重要性を説いた。しかし、留学生達の上達したい一念は強く、またおそらくは体を動かすといえは、刀の素振りぐらいだった彼らには、適度な「運動」という観念も持ち難かったのである。日本を立つ時には、これからの日本を担うために、何としても西洋の学問を学ばねばならないという使命感にもえ、決死の覚悟であったらうから、学問に熱中するのは当然かもしれない。殊に甚三郎の場合は、悲壮なまでにその思いが強かった。篤次郎の書翰によれば、十一月頃から勉強の度が過ぎ、体調を崩し精神に変調を来していった。

ところで、今まで甚三郎の学んだ学校は、ワックスマン博士の報告によって、当初言われていたラトガース大学ではないことは判明していたが、どこであるかは不明であった。石井研堂の「明治事物起源統録(七)」には、「新約克近方小学校に入り修業」したが、日本において「有名の学者」である甚三郎が十二、三才の児童に混じって学業が進まず、脳病を発し発狂したと書かれている。しかし果たして日本において開成所に勤務し、前掲のような著訳書もある甚三郎が、小学校に入学したというのは腑に落ちなかった。<sup>(15)</sup> 今回の資料で、ブルックリンで勉学を開始することになった経緯や、初めブ



ライベートルェッスンを受け、後 Polytechnic Institute に入  
学し、在学生のまま亡くなった事実が明らかになった。

### (三) 発病と進行

甚三郎は生真面目で、繊細な神経の持ち主であったのだろう。四月八日の書翰では、初めての異国の地で「インタープ  
レター」(interpreter)「セルヘント」(servant)か、奥平昌  
邁の従者としての仕事の意味と思われる)など何一つ満足  
のいく仕事は出来ず、「スモールブレイン」(small brain)が  
「エキスポース」(exhaust)してしまったと嘆いている。次  
に出した手紙では、今度は最初の手紙で母や兄を心配させて  
しまったことを気にして、もう大丈夫だ、初旅で英語が思う  
ように通じず、しかも大名のお伴だったから気配りをし過ぎ  
て少し疲れただけだと言いつつ、次便では立派なアメ  
リカっ子になった写真を送ろうなどと家族を安心させている  
が、しかし言葉がよく通ぜず、生活習慣が異なる中で、奥平  
昌邁の随行者としての荷は重かったことが窺われる。ブルッ  
クリンに移ってからは、奥平が不快になることはないと言っ  
ているところを見ると、逆に言えばそれまででは不調や不満を  
もらして、甚三郎の気苦勞も絶えなかったに違いない。

更に彼は金銭的なやりくりもしなければならなかった。出  
発前は年間五、六百両と見積もっていた費用が、余程儉約し

ても八、九百両はかかることがわかった。勉学に加えて、生  
活上の問題や金銭的雑務もこなさねばならない状況は、自分  
は「少しく決断ニ乏し」と自評していた彼にとつて、大き  
な精神的負担であったに違いない。

また望郷の念も強かったようだ。三通の書翰では、親族や  
中津の様子を頻りに尋ねている。四月八日付では明治四年末  
に開校し、兄篤次郎が校長となつて赴任した中津市学校につ  
いて、四月九日付では親族達皆の様子や、正月に行ったであ  
ろう歌留多会の様子にまで触れている。また篤次郎の書翰に  
は甚三郎が生前語っていた話として、日本を立つ前に兄や従  
弟と一晩語り明かした夜は本当に楽しかった、どうか再びあ  
の楽しみを味わいたいと願っていたことが書かれている。

そうした勉学への情熱や強い使命感、望郷の念が重なり  
あつて、次第に甚三郎の神経を圧迫していった。具合が悪く  
なつてからは、費用は高くても構わないから最良の治療を受  
けさせたいという奥平昌邁の希望があり、当時アメリカ随一  
と言われていたフィラデルフィヤ (Philadelphia) の精神  
病院に入院した。発病してからずっと看護にあたっていた江  
木高遠が付き添い、学校長のコックランは医師達との連絡役  
を引受け、パトンなる商人が手段を講じて毎日の病状をブ  
ルックリンまで知らせた。しかし体の衰弱は烈しく、遂に明  
治六年(一八七三)一月二十九日に亡くなった。入院後の病

状は容体書に詳しい。二月二十一日ニュージャージー州(New Jersey) ニューブランズウィック(New Brunswick)の墓地(Willow Grove Cemetery) 内の「日本政府が所持している一角に葬られた」<sup>(16)</sup>

(四) 甚三郎の訃報

甚三郎死去の知らせは、四月二日に東京に達した。篤次郎は衝撃を受け、早速甚三郎に付き添っていた江木高遠の父江木鱒水の許を訪ね、令息からの手紙はないか尋ねた。江木鱒水日記明治六年四月二日条に、午前中篤次郎の訪問を受けたことが書かれている。日記によれば、その時に鱒水が篤次郎に見せた手紙には、甚三郎は神経病を患っているが、「非大病、其他無見」とあり、篤次郎は同居している母の「母心」を少しく慰めるため、その手紙を借りて帰った。<sup>(17)</sup>

ところが、同日午後奥平昌邁および高遠から書翰が届き、そこには、正月以来甚三郎の精神状態が極度におかしくなり、夜も眠れず、何ひとつ心を慰さめるものがなくなつて衰弱し、遂に亡くなったという訃音が書かれていた。弟を失つた悲しみに加えて、母親を何と慰めればよいのかもわからず、篤次郎の嘆きはいかばかりであったか。中津の兄妹妹宛書翰には、幼少の頃から虚弱だった甚三郎がやつと健康になり、学問も身に付けてこれからというときに亡くなつてしまった無念さ

が述べられている。長生きする「悪しき弟」を持つよりは「千百倍も勝」と自らを慰めてはいるが、甚三郎のことについて「何分明精認め不得」、文面から推説して欲しいとの言葉に篤次郎の心中が察せられる。

福澤は、箱根で甚三郎の死を知り、直様帰宅した。四月十五日付島津復生宛書翰で次のように述べている。

唯々驚駭愁傷するのみ。同人は生涯の一親友、これまで共に謀りしことも多く、尚此後互に依頼して成すべき事共沢山有之、仁三郎君帰国の上は斯くも可致、ヶ様にも可取計、此も彼もと、様々に後日の事のみ預め期して相楽み居候処、豈図此度的一条、心中の百事一時に瓦解、何事も手に付不申、今日に至るまで日々夜々唯同様の愚痴を申暮し居候。御前様にも唯々御愁傷に可有之、天命とは乍申、何分にも自から慰る方便無御座候。<sup>(18)</sup>

福澤は甚三郎の人柄を本当に愛していた。甚三郎をめぐる一つのエピソードがある。戊辰戦争の時、戦禍に巻き込まれることを恐れた洋学者達は、官軍が暴力的であったとしても西洋人には手を出さまいと考えて、外国人居留地に住まいを移したり、仮に西洋の籍に入ったたり、外国公館の雇人の証明書を入手したりした。慶應義塾のことも心配してくれる人が

あり、証明書を届けてきたので、福澤はどうすべきか皆に謀った。すると甚三郎が塾の広間に走り出て「顔色を変じ目を瞑らして」塾内の人々を前に、これは内戦である、自分は文を事としていて戦争には関係ないが「内外の分は未だ之を忘れず」(傍点は福澤原文のまま)、西軍が凶暴であろうとも東軍が無法であろうとも、自分に害を加えてくるならば自らこれを防ぎ、力足らざる時は唯死あるのみ、日本人でありながら、報国の大義を忘れて外国人の庇護下に入り難を逃れるよりは、日本人の刃に死ぬべきである。「我輩が共に此義塾を創立して共に苦学する其目的は何処に在るや、日本人にして外国の書を読み、一身の独立を謀て其趣旨を一国に及ぼし、以て我國権を皇張するの一点に在るのみ」、一身独立という大義を忘れれば、我義塾の命脈を絶つことになると演説した。その「語氣凛々、決する所あるが如し」態度に、人々は一言も発することができなかつたといわれる。福澤はこのエピソードを、「故社員の一言行尚精神」という題で、創刊して間もない明治十五年三月二十七日時事新報寄書欄に載せ、「之より社中の気風益固結して曾て動変することなく」、仁(甚一著者註)三郎君の一言亦重しと云ふ可し」と評している。さらに福澤全集緒言においても、この話を繰り返し述べている。<sup>19)</sup>

福澤は後々まで彼の死を惜しみ、慶應義塾は気品の泉源智

徳の模範たるべきと唱えた有名な演説の際も、物故した名士の筆頭に彼の名を掲げ、また明治三十三年(一九〇〇)『修身要領』制定の際にも、小幡甚三郎と小泉信吉とが生きていてくれたら、こんなとき相談相手として一番たよりになるのだが……と嘆いた。<sup>20)</sup>

福澤が記した前掲「小幡仁三郎君記念碑誌稿」は次のように結ばれている。

嗚呼、君を思へば君のために君の死を悲み、我学問の道を思へば道のために君なきを歎じ、天下を思へば天下のために君を失うを患う。強て自から慰めんとすれども愁緒百端止めて止まらず、爰に社中の旧友相謀て碑を建て君の言行を記して後日の記念に供せんとすれども、唯筆の拙なると碑の文面に限あるとに由り、思て云ふこと能はず記して尽すこと能はざるを恨むのみ。

明治六年四月廿三日、君の親友福澤諭吉、慶應義塾社中の差函に従い涙を払てこれを記す。

## 五 おわりに——小幡兄弟への期待——

福澤は、「仁三郎を推挙したのは学問、人物を大成させようとする考えであったが、いまとなって考えると本来身体

強壯でなかつた彼を外国にやったのはかえすがえすも自分の大失策で、わざわざ殺しにやったも同様だ」と悔恨したとい<sup>21)</sup>う。

しかし、奥平昌邁の随行者は彼をおいて他にはいなかった。藩主奥平家をはじめ中津の人々にとっては、福澤はこれからの指標を与えてくれる最も頼りになる存在であった。筆者は既に、奥平家および中津士族への福澤の尽力について若干報告しているので（「奥平家の資産運用と福澤諭吉―新資料・島津復生宛福澤諭吉書翰を中心として」、『近代日本研究』

十一巻、「天保義社に関わる新収福澤書翰（鈴木閑雲宛）」

『近代日本研究』十三巻）、ここで繰り返し述べることが避けられるが、明治三年の帰郷の際「福澤が東京から来たから話を聞かうではないかと云ふやうな事になつて、家老の邸に呼ばれて行た。所が藩の役人と云ふ有らん限りの役人重役が皆其処に出て居る。（中略）夫れから私が其処に出席すると、重役達の云ふに、藩はドウしたら宜からうか、方向に迷つて五里霧中なんかと、何か心配さうに話すから、私は之に答えて……」という一件があつたことにも一端が窺える。<sup>22)</sup>

福澤は、日本が旧体制から脱却し近代日本を築くためには、人々が「一身独立」することが必須であると考えていた。そして「一身独立」のために必要なのは、西洋文明の理解であり、経済的な力であると考へた。明治三年（一八七〇）に中

津の人々にあてて記した「中津留別之書」では次のように洋学の必要性を強調している。<sup>23)</sup>

人は万物の靈なりとは、唯耳目鼻口手足を具へ言語眠食するを云ふにあらず。其実は、天道に従て徳を脩め、人の人たる知識聞見を博くし、物に接し人に交り、我一身の独立を謀り、我一家の活計を立て、こそ、始て万物の靈と云ふ可きなり。（中略）是時に当て外人の憚るものは独り西洋学のみ。博く万国の書を読んで世界の事状に通じ、世界の公法を以て世界の公事を談じ、内には智徳を脩て人々の独立自由を運ふし、外には公法を守て一国の独立を耀かし、始て真の大日本国ならず哉。是即ち我輩の着眼、皇漢洋三学の得失を問はず、独り洋学の急務なるを主張する所以なり

福澤が、旧中津藩主である奥平昌邁に、アメリカ留学を勧めた理由は、昌邁自身のためは勿論のこと、中津の人々が洋学を学ぶ素地をつくるには、昌邁が自ら手本となるべきであると考へたのだから。福澤が原文を考へ、奥平昌邁の名で出された「中津市学校之記」には、留学にあつた昌邁の言葉が次のように語られている。

独り事を為すへ、衆と共にするの樂しさに若かず。余此度独り外国に遊學すれども、旧藩内の士民も余か志を助け、余か學ぶ所の道を學ばんとするは、固よりこれ願ふ所なれば、本県吏人に謀りて、年々家祿の内五分の一を費し、旧藩士の積金に合して父學の資と爲し、此度中津に一処の洋學校を開き、其外当県内の諸方に郷校を設るの議を決したれば、旧藩の士卒族は勿論、百姓町人も余か微意を体して勉強いたし、三五年の後余も亦外国より帰り、互に學業上達の上再會いたすべき事今より樂む所なり。<sup>(24)</sup> (句読点は筆者)

この福澤の意図を理解し、助力してくれるのは小幡兄弟を置いて他になかった。福澤は小幡兄弟に絶大な信頼を寄せていたので、兄篤次郎には市學校を任せ、昌邁の留學を弟甚三郎に任せただけであらう。

ところが、当時賤民視されていた雪駄直し屋に対しても、丁寧に対応し周田を驚かせたというエピソードをもつ甚三郎の優しさや、「亜細亜之國風淫風盛ニして人誠実ならず。此風改ラざれば眞の開化ハ入り難し」「淫風を一掃し眞の開化の域ニ進メヨ」といった一途さが徒となり、神經を病んでしまった。<sup>(25)</sup> 誠に残念と言わざるを得ない。

註

(1) 小幡甚三郎の著書として知られているのは、次の五点である。

『英文熟語集』	慶應四年	兄小幡篤次郎と共編。兄弟が英語を學ぶ過程で書き留めておいたものを、整理して出版したと言われる。
『洋兵明鑑』	明治二年	熊本藩から西洋の戦術書の翻訳を委嘱された福澤が、小幡兄弟と手分けして Emil Schalk『Summary of the Art of War』を翻訳したものである。
『英国軍艦刑法』	明治二年	下士官以下の者に対する軍艦内の刑罰を列記したもの。
『西洋學校軌範』 二冊	明治三年	上巻は英蘭仏普露米の學制の概要、下巻はコロンビア大学の規則の訳。明治初期の學制制定にあたって、参考書となったと言われる。
『新砲操練』	明治三年	浜野定四郎との共訳。「アルムストロム氏野戰砲」および「ホワイトオウルス氏六角砲」の説明と操練法。

参考文献 富田正文『福澤諭吉複製』(三田文学出版部、一九四二年)

(2) 明治五年二月二十日付福澤英之助宛書翰、『福澤諭吉全集』(岩波書店、一九五四年)一七卷一二四頁。

(3) 甚三郎は十二月五日の生まれで、西曆では年が明けて一八四六年になる。通常天保十三年生まれの兄篤次郎とは三才違い

と表記されるが、篤次郎は六月八日生まれて西暦では一八四二年になる。また名前について、福澤は維新後でも仁、其両方の字を使っている。本稿では後掲の書翰の関係もあり、資料の引用以外は甚三郎で統一した。

参考文献 今田見信著作集二『小幡英之助先生』(医歯薬出版株式会社、一九七三年)一七頁。

- (4) 『小幡仁三郎君記念碑誌稿』は『福澤諭吉全集』二十一巻三八五―八頁に掲載されている。
- (5) 『慶應義塾五十年史』(慶應義塾、一九〇七年)二八七頁。
- (6) 『石河幹明』『福澤諭吉伝』(岩波書店、一九三二年)四二三―四頁。
- (7) 前掲『小幡仁三郎君記念碑誌稿』。
- (8) 『福澤諭吉全集』二十一巻二九〇頁。
- (9) 『慶應義塾歴代役職者一覽(増補版)』(慶應義塾塾監局塾史資料室、一九八十年)。
- (10) 『慶應義塾入社帳』復刻版一―三三八頁(慶應義塾福澤研究センター編集、慶應義塾発行、一九八六年)。
- (11) 『福澤諭吉全集』十七巻二二四頁。
- (12) 『世界地名大事典4 アメリカ・オセアニア』(朝倉書店、一九七三年)。
- (13) Polytechnic Institute にて創価大学坂本辰朗氏より、ブルックリンにある現 Polytechnic University (ブルックリン工科大学) ではないかとの御教示をいただいた。同大学のホームページによれば創立は一八五六年である。一八七二―二年頃の資料の有無については現在問い合わせている。

R. F. バッツ、L. A. クレメン著、渡部品、久保田正三、木下法也、池田稔共訳『アメリカ教育文化史』(学芸図書株式会社、一九七七年)。

(14) 『慶應義塾入社帳』復刻版一―一五七頁。

内田儀久『明治に生きた佐倉藩ゆかりの人々』(聚海書林、一九九七年)。「幕末明治海外渡航者総覧」(柏書房、一九九二年)。

(15) セルマン・A・ワックスマン『小幡甚三郎の墓』『三田評論』五五七号(一九五三年)。

富田正文『小幡甚三郎の死』ワックスマン博士の寄書について―『三田評論』五五八号(一九五三年)。

(16) 福井藩からの留学生としてラトガース大学に学び、卒業まであと一ヶ月で結核に倒れた日下部太郎の遺体を葬るために、一八七〇年日本領事館が買い上げた墓所。

参考文献 石井隆『ラトガース大学に使用して―小幡甚三郎先生墓地の近況―』『三田評論』七八四号(一九七八年)。また墓所の近況については、山内慶太『アメリカに小幡甚三郎と馬場辰猪の墓を訪ねて』『福沢手帖』九十五号(一九九七年)。

(17) 『大日本古記録』『江木鰐水日記(下)』(東京大学史料編纂所、岩波書店、一九五六年)一一三頁。

(18) 『福澤諭吉全集』十七巻一四五―六頁。

(19) 『福澤諭吉全集』一巻二二三―四頁および八巻六二―六四頁。富田正文『考証福澤諭吉』上(岩波書店、一九九二年)三〇六―七頁。

(20) 『福澤諭吉全集』十五巻五三四頁および二十一巻三四九頁。

(21) 前掲『小幡英之助先生』一九頁。

(22) 『福翁自伝』『福澤論吉全集』七卷二一五頁。

(23) 『福澤論吉全集』二十卷四九、五〇頁。

(24) マイクロフィルム版『福澤関係文書』（慶應義塾福澤研究センター編集、雄松堂フィルム出版有限会社、一九九七年）K15-A01-01

(25) 雪駄直し屋とのエピソードは、前掲富田「小幡甚三郎の死―ワックスマン博士の寄書について―」参照。

## 資料

(一) 小幡篤次郎宛小幡甚三郎書翰（明治五年四月八日付）一筆啓上仕候。余寒強ク候処、先ツ以兄上様御始メ中津表皆々様御揃、益御機嫌能奉賀候。於東京母人様御始メ皆々様御揃、益御機嫌克被成御座奉賀候。

扱私共事二月十五日「サンフランシスコへ」着。同十七日早朝同所出立、ソルトレーキシチニテ日本使節へ追付キ（使節ハ雪ノ為メ留ルコト殆ント一ヶ月）、チカゴ迄同行。其ヨリ相別れ、廿八日朝ニニューヨーク府へ着。三日滞留ノ後コンネクチコットノ内ウキンチエスタルト申処へ参り候処、此ノ地ハ殊ノ外田舎ニテ、家数モ二十軒カ三十軒位、日本ノ田舎ト一ツモ違フコトナク、学校トテモ只タチーブナ已ニテ、実ニ日本ノ田舎ノ手習師匠ニ異ナルコトナシ。地図ナドモ「コルネル」ノ地図ガ一ツアルカ無キ位、窮理ノ道具ナトハ勿論、地球玉ノ一ツナキ位ノ処。書生トテモ算術ハ「フラクシヨシ」ノ「カラス」カ第一等テ、「リードル」ノ素読ニコマル位ノ人多シ。信（真―筆者註）ニ田舎ノ有様ナリ。氣候ハ殊ノ外寒烈。日本ニテ云へハ箱根山ノ如キトコロナリ。店（只ター軒アリテ味噌塩ヨリ反物マテアルヤーマモノナリ）トテハ一ツモナク、一品ヲ買フニモ山路ヲ四里外ニ行カネハ買フコト出来ス。実ニ不都合無之上地ナリ。此れハ全ク私カ、日本ノ書生ノ外国ニ居ル人タチカ金ヲ不用ニ使フト云コトヲ聞テ、信

(真)ニ五六百兩テ一ヶ年ノ修業カ出来ルト考ヘタルノ誤リヨリ□出シタル失策ナリ(余程儉約ヲ守リ候テモ、八九百兩ヨリ少クテハ、日本人ニハ修業難出来奉存候)。

二週間程色々相考ヘ申候得共、マケオシミヲ捨テ金ヲ費シテ、可然場所ヘ立歸リ候方可然ト相考ヘ、早々取形付ケ、再ヒ三月廿二日ニューヨーク府ヘ着シタリ。此ノ時松田君佐藤君

佐倉ノ佐藤先生ノ子息当国久シクアル人 竹村君 駿府ノ人 高戸君 福山ノ人 ナトノ助ケニテ、ブルークリン(即チ「ニューヨーク」府ノ川向ヒ「ロングアイランド」ノ内ニアル都府ナリ)ヘ參リ、「ブライベート」ニ先生ヲ頼テ稽古相始メ申候。追々ハ Polytechnic Institute ト中学校ニテ稽古仕候心得ニ御座候。当学校ノ「プレジテント」 David H. Cochran ト申人ハ、「元ト他ノ場所ニテ「ノルマルスクール」ノ「プレジテント」ヲ致居候人ニテ、「グートマン」ノ由シナリ。且ツ日本ヘ学問ノ要用ナルコト能ク承知シ、別段日本人ヘハ世話致シ呉レ、学校稽古ノ都合トテモ「スペシアル」ノ自由ヲ与候由ニ付、当地ヘ落付キ申候。御安心可被下候。擬当国着ノ節モ早速書状差上ケ可申之処、初旅ノ処ニ「インターブレター」「セルヘント」其外色々事多ニテ、何ニ一ツ好ク出来コトハナク、実ニ私ノ「スモールブレイン」ヲ「エキスポース」仕候テ、不本意ナガラ書状モ不指上、恐入候次第ニ奉存候。実ニ人並ニモニー(マネー—筆者註)ヲ費

シ、弁理(便利—筆者註)ノ地ニ住マナクテハ、「オポーサー」連デハ中々凌兼申候。委細ノ様子ハ先生迄申上置候間、御覽可被下候。実ニ「インテリオル」ノ食物ナトハ、日本ニテ米ニ魚ヲ添テ食フ方遙カ好キカト考候位ナリ

○右ハ年延引着為御知申上度、旁如此御座候。余ハ斯後便之時候。恐惶謹言。

四月八日

小幡甚三郎 平安

兄上様

尚々時下折角御用心專一奉存候。乍憚皆々様ヘ宜敷御伝言奉希上候

中津学校ハ如何相成候ヤ。定テ御思食ト違ヒ候事モ有之候哉ト相考ヘ申候。「ソクセズ」ノ程奉願候。御翻訳ノ經濟書ハ如何相成候哉。定テ少シハ御運ビニ相成候事ト相考申候。

信(真)ニ御失礼ノ事申上候得共、「パンク」ナトノ如キ「アルト」ニ掛リ候処ハ、心得タル日本人ニテモ、或ルイハ横浜ノ「パンク」ノ外国人ニテモ御聞合セノ上、御翻訳ニ相成度候。本ノ上ニテ知れキッタヨリナコトガ、中ニ不分ズテコマリ候ヨリ、一寸申上候間、左様御思食可被下候。外ニ申上度義モ山々御座候得共、後便迄申上ノコシ候

補註—日本使節とは岩倉使節団のこと。岩倉一行は明治四年十一月に日本を發った。ソルトレイクシティには一八七二年二



月四日に着き、同二十六日シカゴに達した。

二「インテリオル」は interior か。

三「御翻訳ノ經濟書」は「英氏經濟論」Wayland's The Elements of Political Economy. の邦訳。明治四年に慶應義塾蔵版で三冊が出版され、同六年小幡氏版として再刻する時に続きの三冊が刊行された。

(二) 母および「皆々様」宛小幡甚三郎書翰

(明治五年四月九日付)

春暖相催申候所、母人様御始メ皆々様御揃、益御機嫌克被遊御座、恐悦之御義奉存候。於中津兄上様御始メ御近親様方御揃、是亦恐悦之御義奉存候。

扱私事も前便書状指上候比ハ、丁度不都合ノミノトキ、有リノ儘ニ相認指上候間、定テ深く御心配ヲ掛候事と恐入申候。其後ハ間モナク全快、昨今ハ旧前ノ通りノ甚三郎ニ相成居申候間、御安心可被下候。何れ此ノ次ノ便ノトキ迄ニハ、立派ナ「アメリカ」ッ子ニナツテ写真ヲ指上申候間、写真ヲ御覽ニナツテ御安心可被下候様呉々奉願候。全ク初旅ノ処へ言語ハ不通、連ハ大名連れ、余り心配シ過キテ少シヨワリ候マテノコトニテ、決シテ真ノ病氣テハ無之候間、左様御承知可被下候。

其上先日中ニ住居候処ハ、余り田舎ニテ万事不都合故、其

場所ヲ去リ「ニーヨルク」(日本テ言ヘハ江戸ノ様ナトコロ)ノ川向フ「ブルークリン」ト申処ヘ當時ハ住居候(日本ニテ云ヘハ品川位ノ処)。此地ニハ日本人モ沢山居リ、宮様モ御住居被相成居候場所、余リ繁昌過ル位ノ地ニテ、何一ツ不自由ノナキ地ナリ。此地ヘ参リ候後ハ、奥平様モ御不快ナトハ決シテナクナリ大安心仕候。委細ノ様子ハ委シク先生迄申上置候間、桜井さんニテモ御頼ニ相成ツテ、一寸拝借シテ御聞キ可被下候。

お春さんハ如何候哉、青バ□□□□候ヤ御尋申上候。折角大事ニ御養育可被遊候。併シ衣物ハ余リ衣セ過キヌ方カ宜敷カト奉存候。御祖母様ニハ、定テ万事御世話ニ相成居候事と奉存候。御姉上様ハ如何被為有候哉。當時ハ御達者ニ被為有候哉御尋申上候。御正月ノ歌留多ハ如何ニ候哉、御集ニ相成候事と奉察候。母人様ハ不相変御元氣ト奉存候間、御病氣ナトニ付テハ一ツモ御氣遣申上候事ハ無之候。折角御氣楽ニ御暮シ被下候様奉願候。兄上様御留主、私ハ留主、定テ御淋しくハ被為有候事と奉察候。桜井さんニハ日々被為有候事と奉存候。中津の姉さんやお糸さんハ如何ニ候哉。兄上様の御出故、定テ御喜ひの事と奉察候。此書状御覽済の上、中津の方へ御廻し可被下候様仕たし。

私事モ兩三ヶ日前より、少シノ都合ニヨリテ暫クノ間ダ奥平様ト離れ、何れ長クモ二週間位也。只今ハ宮様ノ御入込ニ相

成居候御医者 決シテ病氣デハナシ さんノ内へ入込ミ居リ、真ノ御娘さん達ト同シ「テーブル」テ食事シ、不行義モノニハ少シ心配ニ御座候。御一笑可被下候。食物ハ横浜ヲ去テ後毎日肉類ノミナレハ、折々御宅テ御膳ヲ戴キ候事や、御酢ナトテ御一同ニタベ候事ヲ思ヒ出シ申候。併シ当地ノ食物好キモノノミナレハ、必ス少シハ肥満シテ、達者ニ相成候事ト相案申候。修業ヘモ是レカラコソ相掛リ候事ト、相案罷在候。

当地ニ参候テハ、中々日本流ニ「ブシヨール」ヲスルコトハ出来ス、毎朝立派ニ水テ体ヲフキ、「セキケン」ヲ沢山ニ使ヒ、髪ナトハ一日ニ少クモ四五度位ハツケネハナラス。テノ先ハ少クモ飯ノタビニハ洗ハネハナラス。白膚衣モ少クトモ三四日目ニハ替ヘネハナラス。白ノ襟リハ毎日カ或ハ二日ニ一度ハ替ヘネハナラス。御膳ヲタベル有様カラ体ヲ「ミカク」有様ハ、若イ江戸ノ御娘さんカ御嫁入りテモシタトキノ様ナ有様、自分ナカラオカシクテカナハナイケレド、風俗ナレハ致方無之。併シ少シハ色男ニ相成候ヤト相案ミ罷在候。御一笑可被下候。右之外申上度義モ山々御座候得は、先ツ無事ニ有之候概為御知申上度、旁如此御座候。

恐惶謹言

四月九日

小幡甚三郎

母人様  
皆々様

尚々時下折角御用心專一ニ奉存候。乍憚安井様麻布御叔母さん桜井さん今泉さん其他何方様へモ、宜敷御伝声奉希上候。

補註一「宮様」は華頂宮博経。

二「桜井さん」は桜井恒次郎。中津出身で慶應二年慶應義塾入社。慶應義塾出版局の中心人物のひとつで、奥平家の資産運用にも関与している。拙稿前掲「奥平家の資産運用と福澤諭吉」参照。恒次郎の息子信四郎の許へ小幡篤次郎の次女静が嫁いだ。

三「安井様麻布叔母様」は不明。「今泉さん」は中津出身の今泉郡司か。

(三)三輪一彦佐々木吉十郎宛小幡甚三郎書翰

九月二十九日付

冷気ニ相成申候処、先以御両家御揃益御安康奉賀候。

扱後ハ申訳も無之御不音仕候条、真平御仁免可被下候。私事モ不相変医者ニ修業仕候間、乍憚御安心可被下候。

去冬より愚兄義御地へ罷出候。万事御約介ニ相成候義ト奉存候。東京へ帰着之後の書状先使ニ相達し、御地御様子委細ニ相知れ大安心仕候。姉事モ此節ハ先ツ全快之由、何寄之事と存候。定テ皆様ニ者、不一方御約介相蒙候事ト奉存候。

帰農商モ弥実地ニ行れ候時節ニ相成、定テ皆様御骨折之義被存候。右ハ為指□義者無御座候得共、御機嫌奉同度迄如此

御座候。恐惶謹言。

九月二十九日

小幡甚三郎

三輪一彦様

佐々木吉十郎様

尚々寒氣ニ向ヒ候間、折角御用心可被成候。乍末筆皆々様へ宜敷御伝声奉御願上候。

(四) 神経病院医師ジョンスによる容体書

容体書

千八百七十三年第一月三十一日ヒレデルヒヤニテ

神経病院医士

ジョンス

拝啓。小幡君此病院ニ御入院被成候時ハ、己ニ身体大ニ疲れ、精神の働きモ全ク乱レテ其常ヲ変シ、且ツ不安之症候甚シク、絶エス手ヲ顫動シ、又日本語ニテ頻リニ謔言ヲ発シ、或ハ其間ニ折々英語ヲ交ヘリ。食物の養とナルヘキモノハ相応ニ御給被成候得共、何分腸胃之力なく、是ヲ消化シテ血トナスコト能ハス。故ニ身体日増衰弱セリ。

元來頭腦ノミナラス、脊髓並ニ神経叢ニモ御病氣有之。依テ体内の諸道具ニ於テ一トシテ其功用ヲ変セサルハナク、心臟之働きモ日増ニ弱クナリ。随テ全身の温度大ニ減少シ、且著シク筋力の疲労ヲ致セリトモ、不安之症ノミハ決シテ退カ

ス。其死スル二三時ノ前マテ早クニテ謔言ヲ発セシカ、漸ク衰弱ヲ極メテ、遂ニ御死去被成候。

御病人元來神経ヲ過分ニ勞シタレハ、其力衰へ、其働ヲ遂サルニ至レルカ故ニ、小生始メテ手伝之医士等も、御療治ニハ深く心勞致候得共、其甲斐なし。残念之至ニ奉存候已上。

(五) 小幡篤次郎宛コックラン書翰

一千八百七十三年第二月四日

「ブルークランド」ニ而

拝啓。江木氏ヨリ足下ニ呈スヘキ訃音ニ差加エ、寸楮ヲ以テ足下ノ愛弟小幡君御病死ノ次第ヲ申上候。

然ハ第一ニ申上度ハ、小幡君我國へ御來遊之後、學問ニハ無限勉強被成、就テハ必要ナル學問ノ各科ニ於テ、御上達被成度企望ノ心厚キヨリ、心(欠損)力ニ堪サル程ノ御勉強ニモ可相成哉と恐ヲ抱ケリ。實ニ日本ノ遊學生ハ、身体健康ノ法則ニ叛キ可申哉と存シ、小生毎々勉強ニ過テ身ノ養生ヲ顧ミサレハ、其害ノ來ルコトヲモ弁解致シ、己ニ二個月斗以前ニモ此人達ヲ集メテ、身体健康ノ為ニハ運動ヲ欠ク可カラス、殊ニ學問ニ勉強スル時間ヲ定メテ、其間ニ精神ヲ舒暢シ、且睡眠ノ時刻ナカル可ラサルコトヲ忠告セリ。

然ルニ小生ハ、小幡君カ學問ニ上達セントスル心ヨリ、右等ノ忠告ヲモ等閑ニセシコトヲ恐レリ。却説小幡君御病氣ト

ノ報知ヲ得候トキ、小生御病室へ御見舞申候処、其客体ノ非常ナルニ驚キ、直様当国ニテ有名ノ医師二人ヲ迎エテ診察ヲ乞ヘリ。兩人ノ医師ハ薬ヲ用ヒテ其巧驗如何ニ注意イタシ候後、「ヒレデルヒヤ」ニ於ケル神経病院へ送リテ療養センコトヲ勸メリ。コレハ専ラ神経病ノ治療ニ於テ我國第一ト申病院ナリ。全体「ブルークランド」ニ於テモ神経病院一ヶ処有之。療治介抱等モ行届可申候得共、奥平君申候ニハ、小幡ノ為ニハ此國ニテ最上ノ医者ニ掛ケ、最上ノ療養イタシ度、入費ハ不苦トノ義ニ付、向ノ医師ニモ示談ニ及ヒ候処、同人ヨリモ「ヒレデルヒヤ」ニ移リ候得ハ、御病人回復ノ望モ多カルヘシト申聞ケ、且奥平君ノ寛大ナル心ヨリ、費用ヲ不厭「ヒレデルヒヤ」ニテ最上ノ療養イタシ度トノ事ニ付、小生輩モ御病人ヲ彼ノ地ニ送り候事ニ一決イタシ候。

然ルニ悲ヒ哉、小幡君ハ己ニ人力ヲ以テ救フ可ラサル場合ニ及ヒ、身体甚シク衰弱シテ病ノ発作ニ堪ルコト能ハス、速ニ人事ヲ省ミサルニ至リ、右ノ病院ニ入タル後、纔カニ第六日ニ当リテ空シクナリ玉エリ。

御令弟御病中ハ、最上ノ愛患ヲ以テ御療養至ラサル所ナケレハ、小生此訃音ノ書ノ認ルニモ満足致し、足下ニ於テモ御心ニ快カルヘクト存申候。但シ「ブルークランド」御出立以前ハ、江木氏日夜御介抱イタシ、暫時休息ノ間ニハ御病人ノ望ニ任セテ、学校ノ教官モ御病床ニ看待イタシ申候。又「ヒ

ラデルヒヤ」ニ移リシ時ハ、江木氏ト外ニ医師一人付添參リ申候。「ヒラデルヒヤ」ニテ名高キ一商人日々右ノ病院へ見舞ヒ、御病氣ノ容子ヲ電信機ニテ、一々小生等ニ報知イタシ呉申候。

○御死去ノ後「ニウブロンズウィッキ」ニ於ケル墳地ニ埋葬スルニ決シ、教官其他数人御國ノ遊学生ト共ニ葬式ヲ送り、常例ノ礼式相済引導ノ信文ヲモ唱エ候後、御遺骸ヲ埋メタリ。御墓ハ御國ノ遊学生ノ中、此迄是地ニテ死去イタシ候三人ノ墓所ノ傍ニ有之申候。小幡君ノ御世話イタシ候銘々ハ、骨肉ノ縁血無之トモ四海皆兄弟ノ縁アレハ、同情相憐ノ心ヲ尽セリ。且又小幡君モ我輩ト共ニ天ノ父ヲ同フスレハ、我輩ノ死セシトキニモ願ハシキ親睦ノ情ヲ尽セリ。

是書状ハ江木君ヲ為待置相認メタレハ、冀クハ其粗略ナルヲ恕セヨ。

足下ノ親友

ブレジテント、コックラン

小幡篤次郎様

(一六) 兄姉妹宛小幡篤次郎書翰 (明治六年四月四日付)

御三家様御揃、益御機嫌克被成御座奉恐悅候。爰許母人様御機嫌克、私共無異消光仕候。乍憚御安慮可被成候。

一米國より江木高遠 備後福山土族華頂宮隨從ト申 仁並ニ

奥平公より之御書翰ニ、弟義去年三月ブルウクリン府え転居以来、勉強ヲ節度し運動撰生ヲ主とし極めて壮康、未タ嘗て医薬ヲ要せず。

然ルニ去年十一月頃より勉強少しく常度ニ過ぎ、友人の忠告を極るニ至ル。今年正月初旬より、神経過敏ニして夜間多クハ安眠ヲ得ず。脳髓之疲労より鬱怙愉快之心なく、良友百方之ヲ慰ると雖トモ、出行心氣ヲ爽ニするを能せず。仍而同六日、江木氏誘ふてスミスと申ス医者ニ至り診察ヲ乞ふ。医言フ、君之病神経ニ在り。身体ヲ強壯ニすれハ神経之疲労も癒へ、心自ら愉快ヲ覚ふへしとて、健胃劑及鎮経劑等ヲ与ふ。其功驗ニて安眠し、且食氣も大ニ進ミ候得共、何分神経之疲労より鬱々不樂、飲食も又候不進ニ相成、医薬其功ヲ奏せず。逐日衰弱ニ赴候ニ、廿三日学校之大統領コクラン氏ヲ始め、奥平様其他ブルクリン之名医共相談ニて、病院ニ入れ候評議ニ相成。当時フヒレデルヒヤ之病院ハ合衆国中第一番之所故、其費用亦大なれども、奥平様之患召ニて是非之レハ入よとの事ニて、愈決議病院え入り候処、追日疲労ハ相増し、胃之消化ヲ失ひ、飲食も滋養之功なく、名医百方術を尽せども終功驗ヲ見ず。同廿九日午前十一時過空ク相果て候よし。誠ニ言語ヲ絶し、夢之如ク幻之如ク、唯々泣沈十方ヲ失ひ罷在候。

神経之疲労より心思ニ常日ニ変り候故、遺言等も無之よし。病中友人ニ話し候言葉一二ヲ記し参り候。

亜細亜之國風淫風盛ニして人誠実ならず。此風改ラざれば真の開化ハ入り難し。予若し死せハ、何卒諸君尽力して此淫風ヲ一掃し、真の開化の域ニ進メヨと。又曰ク、我兄及我福澤師皆良知明にして、才能人に勝れり。其情懇切にして又決断あり。我之ヲ敬し之ヲ愛すル実ニ深し。予ハ少しく決断ニ乏シと雖トモ、正直善良智之明ニして情之親睦ナルコト、我兄我師ニ次ク可シと。又曰ク、奥平公ハ柔順にして艶しき良心ある人なりと。又曰ク、予奥平公より戴キタル衣ヲ寝衣として病床ニ臥スコト、実ニ難有事なりと。又曰ク、我日本ヲ発スルに臨み、我兄我從弟と一夜同床ニ臥し徹宵親語せり。嗚呼其夜の娛如何ソヤ。何卒斯ル娛ヲ再ヒスルヲ得ンと。

仁三郎小幡

日本人

二十六才

千八百七十三年

一月廿九日死

(棺の図あり―筆者註)

棺の兒図ノ如し。側ニ銀の手ハツ相付、棺の蓋の上ニ、銀地の板ニ姓名住居行年月日を刻めり。棺中ニ遺体ヲ安臥せシメ、花萼ヲ以て之ヲ積メタリ。墓石之儀ハ、雪之消滅致候後ならてハ相立候儀出来不申候間、来ル六七月之頃迄ハ、延行

可仕被相考候御考も御座候ハ、後便奥平公迄申上ヘク候と申越候。

病中看病等親切ニ致具候人ハ、江木高遠佐藤百太郎 佐藤舜海と申ス当時大典医之息子 松田晋斎 松山藩義塾同社、洋人ニハ学校大統領コ克蘭氏病中毎日数度訪来、或ハ食物ヲ携来リ、懇厚ニ世話いたし呉れ、病院ニ送ル杯医者との評議皆引受世話あり。ニュウオルク商人バトン氏病中来訪、病院ニ入り候ハ、同所出店の番頭ヲ朝夕病院之見舞ハしめ、電信機ヲ以て毎日ニ容体ヲブルウクリンえ報せり。

三十日夜、遺体ヲ病院より同地モールスと申ス人の処え奉シ帰り、此処にて沐浴屍ヲ清め、黒色の洋服ヲ着せ棺中ニ安臥せしメ、綿の布団上ニ枕ヲセシメ、蓋フニ花蓴ヲ以テス。二月廿一日午後第二字、屍ヲニュウジェルシ州フランスウツキ府ニ、日本政府ニ属せる墳墓地ニ葬ル。此日天気清朗、葬ニ会するもの皇洋人合せて三十五人、法教師兩人葬式を執行せり。

右之次第御同様傷憫無際候得共、療養等残る処尽し、送葬等ニ至るマテ万事無遺憾候得は、御同様ニ天寿と明らめ、自身の健康ヲ害せざるを肝要とす。亡弟事も幼少より虚弱之処漸ク健康、少々学問等も覚へ、死後も人ニ惜まれし様相成候得共、母上様ニは甚以御氣の毒、御慰ニも殆と相困り候得共、百までも生存候悪しき弟ヲ持候ニは千百倍も勝り候と、明ら

め候外ハ無之何とも残念無限候。母上様ハ案外御明らめよろしく候故、必ず々々御氣遣被下間敷候。

右文章前後いたし御読分兼と奉存候得共、何分明精認め不得、御推読可被成下候。尚外御近親様へ荒増申上候間、容体書等御被見之後御廻奉願候。且落候方ハ宜敷御知奉頼候。県庁へも御届可被成下候。又同人初毛臍帯等ハ、尊誠院様御墓側ニ御埋奉願候。墓ハ当所ニ碑銘ニても建て可申候間、御建御無用可被下候。右申上度、勿々如是御座候。謹言

四月四日 篤次郎

兄上様

姉上様

お糸様

追而叔父様伯母様には為御知申上候得共、外御近親様之兄上様より為御知奉仰候。私にて認兼候間御助力奉仰候

補註一棺の図については「書簡から知る福澤諭吉」『三田評論』一

〇〇一号参照。

(にしざわ なおこ 福澤研究センター嘱託)